第六章　行動に於る悟り

第六章　行動に於る悟り

歡喜は法を経て現はれるを知れる人にして能く法を超越するを覚えるのである。法の束縛がその人に対し存しなくなったと云ふのでなくて、束縛が自由の形で体現したのである。自由になった霊は束縛を受くるを喜び、その如きものをも避くるを求めない。これ束縛の一々に於て自由な霊は創造に喜びを覚

ゆる無限の活動力の示現を感ずるからだ。

事実、束縛なき所・狂的な放縦のある所では、霊は自由なるを止める。てこに霊の苦痛があり、無限からの霊の分離があり、深に対する霊の苦痛がある。誘惑の呼び聲に應じて、霊が法の束縛から墜落し去る時はいつでも、霊は母親の暁の支へを奪はれた子の如く叫び去す。「私を打たないで下さい。」と。霊は懇願する。「私を縛って下さい。」「オヽ、私を世の法の束縛の中に縛って下さい。私を内

外共に縛って下さい。」フオン、私をしっかり把まへて下さい。世の法の抱持の中で、世の歡喜と一緒に私を指り上げて下さい。衆の致命的弛緩から世の困き把握によって守って下さい。」

法は歡喜の対蹠物であるとの思想の下に、陶酔を歡喜と思ひ誤る人があるかの如く、印象は、行動は自由に支するとと考へる人が多々あるが、行動力は物質面に在るのを以らの人々は、活動力は物質面に在るのを束縛するものと考へて

で、霊の自由を精神を束縛するものと考へて

ゐる。然し我々は、歡喜が法の中に現はるる如く、霊は行動の中に自由を見出すと云ふことを記憶しておかねばならぬ。觀喜が外部に在る法を望むのは、たゞ小なりけでは現はれ得ぬからである。同様に霊が外的行動を欲するのは、て小自身に自由を見出し得ぬからであるの。人生の霊は幸に活動して自らの抱持からの脱れ人としつゝある。若しさうでなかつたならば、何等自発的な仕事を為し得なかつたらう。

人百が行動し、そして人百の裡に潜めるものを現実にする小ばする程、人百は遠方にある未成物をそ小だけ近くに齎らすのである。その実現化の中に人百は絶えず層一層自分自身を明確にしつゝあり、家、社会に於る物々を活動の真中で、益々新しい物相の自分自身を明かに見つゝある。この觀察は自由のためになる。

自由は暗黒の中にもなく、漠然の中にもない。漠然の束縛程恐ろしいものは世にはない。

。種子が一生懸命になって芽を発し、蕾が花を開くのは、この漠然から逃小んがためである。我々の歌の中の考へが絶えず形をとって現はる機会を求めつゝあるのも、この漠然の包囲から逃小んがためである。同様に我々の霊は漠然の霧から逃小、戸外に出でんがために、この地上生活の目的には決要ではないと雖も、絶えず自ら行動の新鮮な分野を拓き、活動の新しい形を考案するに多忙である。何故か。霊は自由を欲するが故である。霊は霊

自身を見ることを欲し、霊自身を実現することを欲する。

人類が毒悪な密林（ジャングル）を伐り倒し、自分のために庭園とする時、かくして人類が美を醜の囲から解放する時、美は人類自身の美となる。美にこの外部の自由を与へずしては、人類は美を内部に於て自由になし得ない。人類が法や命令を社会の我儘の眞只中に植附ける時、人類が悪の障碍から解放する善は人類自身の霊の善である。かく外部で自由にさかることを

となしには、善は内部で自由となり得ぬ。かくして人類は絶えず行動して力や美や善や霊のルのを自由にすることに専念してゐる。そして人類がそれを小に成功すればするだけ、それ丈け大きく自分自身が成るのを見ゝそれ丈け人類の自我の知識の野は広くなる。

優波尼沙土（ウパニシャッド）に曰く「唯活動の眞只中に於てのみ汝は百年生きんとこそ思ふべし」(154)と。これは霊の獣性を十分味はった人類の言である。

十分に霊を了解した人々は決して人生の悲

衰、行動の束縛を悲しびな語調で語らなかった。その人々は果杯が脆いので抵抗に堪えきれるものではない。その人々は力一杯に生命に縋り付き、「果実が熟す迄離れたくない。」と云う。その人々は自分の生活や仕事に、一生懸命に自分自身を表現せんことを、歓喜して望むのである。苦痛や悲哀は彼等を失望落胆せしめない。彼等は自分の心の重荷によって、うちひしがれることはない。我れに勝てる英

雄の如く、頸(カうべ)を直ぐに立て、彼等は悲哀を嘗めたる盞の涙や憎す輝きの中に自分自身を見、且つ示しつゝ人生を行進する。彼等の生命の歓喜は全宇宙に建設と破壊とを行ひつゝある活力の歓喜と歩調を一にする。彼等の生命の歓喜と一緒になって、日之の歓喜、自由なる大気の歓喜が人生として内外一の心地より調和を支配せしめる。「活動の真只中に於てのみ人は百年生きん人とこそ思ふべし。」と云ふのは彼等である。

人百に於てこの生命の歓喜、この仕事の歓喜は絶対的に眞である。それは我々の迷想であり、我々がそれを投げ棄てねば我々は自我実現の道に入り得ぬと云ふてゐる無駄である。活動の世界から離れて無限者の実現を試みることは你の役にも立たぬことだらう。

人百は強制されて活動するものであると云ふは真理ではない。若し一方に強制があれば、他の一方には花びがある。一方で行動はその自からなる迄に相乗されゝ、他方で行動はその自からなる

遂行に急ぐ。これ人百の文明が進むに一れ、人百が義務を増やし、自ら進んでどし（仕事を拵へる理由である。人百は、自然と云ふものは人百を北しとしておくに足るだけの仕事を人百に与へて居り、事実、自然は飢渇の鞭打で人百を北に到る迄働かせてゐると思ふであらうが、さうではない。人百はそれを以て十分と考へない。人百は自然が鳥獣と同様に人百に命ずる仕事を為すだけでは満足して休み得ない。人百は行動でも是れ其方物に勝

ルまけルばならぬ。如何なる創造物も人生程
壁命に働かねばならぬものはない。人生は社
会に於て行動の広大な分野を自ら窒出せざる
を得ぬやうにされてゐる。そしてこの分野に
於て人生は永久に建てたり、毀したり、法を
作ったり、法を廃したり、物質の堆積を積み
上げたり、絶えず考へたり、求めたり、苦し
んだりしてゐる。その分野に於て人生は強大
な敵ひを敵ひ、絶えず新しい生命を獲得して
難難を避けるどころか、花人で、しかも絶えず新しい難難の重
荷を背負って来た。人生はその近接の環境の
囲ひの中では完全ではなく、又、人生はその
現在より一層偉大であり、一歩にじっと立っ
てゐることは心地好くとも、生命の阻止は人
生の真の本命を、人生存在の真の目的を破壊
することを発見した。

この破壊に人生は堪へられない。従って
人生は己が現在に超越することによって背丈
を伸ばすために、即ち人生が未だ達してゐな

マハティビナスティブ (155)

いものに成るために人生は労苦し苦しむのである。この労苦の裡に人生の栄光はあるべき。人生が全ての行動の分野を制限することを求めず、に、絶えず進歩を拡げることに専念してある人生は余り遠くへさ迷ひ出るので、人生の仕事がその意味を失ふ位ふもある。そして人生が彼方此方へ突進することは、中心を要にせる恐るべき渦巻を起す。利己主義の渦巻、力の誘りの渦巻を。尚、流れの力が失はれる限り、何等の恐怖はない。人生の活動力の障碍物や死せる堆積物は消散され、迅び去られる。衛動は自ら誤りを正す。霊が停滞裡に眠る時にのみ霊の敵は征服力を獲得する。そして此等の障碍物は邪魔になりすぐて救ひ拔けない。これ故に我々の師により、働くために我々は生きねばならず、生きるために働かねばならぬ、即ち人生と行動とは不可分に技び附いてゐると我々は教ふされたのである。

生命はそれ自身だけでは完全でないと云ふこと

は、びに生命の特色である。生命は外に出なければならない。生命の真理は内部と外部との交通に在る。生きるためには肉体は外部の光や空気と接触を保たねばならない。

単に生命力を得るのみでなくて、生命を示現するためにも。肉体がそれ自身の内部活動に如何に完全に従事しているかを考へよ。その心臓の鼓動は一刻と雖も止まってはならぬ。その胃、その腸は小止みなく働かねばならぬ。然しこれだけでは十分ではない。肉体は外に

向ひ、始終、休みはない。肉体の生命は肉体を外部の仕事と運動とのはたらき舞踊に連れて行く。肉体は肉体の内的組織の循環で満足させられべくもない。そして唯、肉体の外に遠足して歓楽の充足を見出すのである。

霊に一いても同じである。霊はそれ自身の内的感情や想像の上に生き得ない。霊の内的意識を養ふためのみならず、それ自身を行動に供するために、常に外物を必要とするのである。

若し我々が眞理そのものであるものを二つに分つならば、我々は生きることが出来ないと云ふのか、まことに眞理である。我々は内外共に眞理そのものである為の中に住まねばならぬ。我々が沖きどの方面で定しやうと、我々は自己を炊き、扶失を拓くのである。「婆羅吸摩は私を見捨てゝおきない。私から婆羅吸摩は私を見捨てゝおきない。」(156)若し我々が我々は唯、内觀に於てのみ婆羅吸摩を了解し、我々の外的活動から婆羅吸摩を云らしない、即ち我々が

外部の奉仕によつて婆羅吸摩を崇拜するのでなくて、我々の心中の愛によつて婆羅吸摩を享受したいと云ふならば、若しくは、若し我々が反対を云ひ、且つ我々の人生探求の旅の一面に於て我々自身を迫害するならば、我々は一挙に没落に陥するであらう。

歐洲大陸に於ては、我々は人生の害が主として自身を外部に拡張することに固執してゐるのを見る。即ち力の行使の広野が重の野である。歐洲大陸の偏欲は全く拡張の世界に対

していあり、大陸は充実の野である内的意識の野を顧みない。否、強ど信じない。充実の空成は大陸のためには係慮にも入れない様に思ふと迄大陸は寄へてゐる。大陸の利子は常に世界の拠りなき進歩を使る。その形而上学は沖自身の進化を告げ始めた。彼等は神は存在すと云ふことを承認しない。彼等は神も無生成しつゝあると主張するのである。

彼等は神が常に彼等が指示し得る制限より也大なると共に、て小は又完全であることゝ、

一方に於て婆羅吸摩は進化しつゝあり、他方に於てを小は完全であることゝ、一面婆羅吸摩は本質であり、他面て小は示現であることゝ、丁度、歌と歌る事との如く同時に両者合してゐることを了解し得るのである。こ小は歌ひ手の意識を無視し、歌る事のみ如進行しつゝあり、歌は無いのだと云ふが如きである。疑ひもなく我々は直接に唯歌子ことのみに感附いて居り、てして如何なる一時も全体として歌に使して感附いてゐない。然し完全な歌は

歌ひ手の霊の中にあることを我々は姓孩認識しないか。

力への陶酔を我々が西洋人に認めるのは使徒が実行と生成とを強調するためである。此西洋人はいつも頑固に、一実行中心たらんことを欲し、決して完成したらんことを欲しない。即ち西洋人は物の組織に於て死に当面し、捆ちべく運命附けられてゐる物に思はる。西洋人は物の組織に於て凡ての物を奪取し、空成の美を知越の位置を所有する迄欲せず、

らないのだ。

印度に於ては、先陰はびに反対側から生ずる。印度の偏欲は内的世界に対してゞある。我々は力の分野、拡張の分野を罵詈を以て排斥せんとする。我々は冥想して、婆羅門教を唯の完全な物相に於てのみ了解せんとする。我々は婆羅門教を宇宙の大規模な交易の中で、その進化の物相に於て見ない物に運命附けられてゐる。こゝに我々が印度の求道者の中に、霊への陶酔と決然的な霊の貶下とを屢々見出す

所以である。印度人の信仰は如何なる法の束縛も認めようとしない。彼等の聖像は自由に飛翔する。彼等の行動は理性に依りかの説明を与へるをいさぎよしとしない。婆羅吸羅を其の創造物と不可分に見んと空しくも試みて、彼等の智・力は自らを石の如くに干乾らびしむる。彼等の心はを小自身の流出の中に婆羅吸羅を呼び込めんとして、情熱の恍惚の極に溺れて気絶する。彼等はかくの如く、法の束縛や外部世界に於る行動の要求やを無視することへ居ない。

然し真の霊性は我々の聖談叢に教ふる如く、内と外との相関の中に、力が平静に釣合つて流るるのである。真理はその法を持ち、その歓喜を持つ。真理の一面に於ては神を仰ぎ(157)火は燃えるしと歌はれつゝあるし、他面に於ては万物は歓喜から生ずるしと歌はれ(158)、

によつて人性が蒙むる力や性格やの損失を量る彼等かの標準を手の届き得る所に持つてさへ居ない。

ある。自由は法に従ふことをしには到達し得

以。所故かならば、竪羅吸琴は一面に於ては自己の真理によつて導ら小、他面に於ては自己の歡喜の裡に自由であるからだ。

我々自身はと云へば、自由の歡喜を十分に獲得するのは、我々が全的に真理の束縛に從ふ時のみである。どんな風にしてか。竪琴に縛ら小た絵のを小の如くに。竪琴が真に絵を張ら小る時、束縛の力に些かの死みもない時、その時にのみ音樂は生小る。そして絵はその旋律の中に自らを超越し、一々の諧音毎に真の自由を見出す。一面に於て絵が音樂の中にかゝる自由の範囲を見出し得るは、他面に於て絵がかゝる厳重な規則によつて締め附けら小てゐるからである。絵が真でない限り、絵は実際、学に導ら小てゐたゞけである。然しその束縛を死めることは真の調子を得る迄絵がかつちりと締めら小ることによつて始めて、絵が完全に達成し得る自由への道ではなかつたであらう。

我々の義務の低音部及び最高音部の絵は、

我々が眞理の法に從ってしっかりと調子を合せておかぬ限りは、唯束縛であるのみ。そして我々は不活動の無への絶緩を以自由と呼び得ない。私が眞理、即ち達磨(159)を求めての眞の努力は行動の無視に存せずして、永遠の調和に一層緊密に行動を調節する努力に存することを云ひたいのは、この故である。この努力の型句は、一切世俗業をなさうとも、その活動の凡てを通じて婆羅吸摩(160)に自らを献げ、婆羅吸摩に献ぜよ。

婆羅吸摩と合一への道となる時、靈が靈自身の歡望へ常に帰ることを止める時、靈の中に我々の献身が益々激烈となる時、歡喜は支配する。その時に完全がある。自由がある。その時に此の世に神の王が実現される。

その片隅に坐して、行動に於る人數のこの壮大なる自己表示、この自己犠牲を愚弄せんとする者が誰かあるか。神と一との合一は全じなければならぬ。この献身は靈の歌である。この歌の中に靈の自由はある。凡ての業が婆羅吸摩と合一への道となる時、靈が靈自身の歡望へ常に帰ることを止める時、靈の中に我々の献身が益々激烈となる時、歡喜は支配する。その時に完全がある。自由がある。その時に此の世に神の王が実現される。

その片隅に坐して、行動に於る人數のこの壮大なる自己表示、この自己犠牲を愚弄せんとする者が誰かあるか。神と一との合一は全

人類が、日夜と嵐との中で、幾時代かを掛けて苦心して建設した空に聳ゆる人工性の偉大さの聖堂から離れて、彼自身の想像の所産の隠遁的享受の中に見出すべきものと考へる人が誰かゐるか。この隠遁的交通が宗教の最高の形と考へるものが誰かゐるか。

おゝ、自己陶酔の酒に酔ひしれて、心の狂へる放浪者(サンニヤーシン)(101)よ、人性の広野を横切って、大道治ひに進む人生の霊の竹進、宇宙への霊の拡大を阻む境界を乗り越へるべき運命を背負はされる

霊成就の車に乗って、霊が竹進する轉ぎをはやし耳かすや。少々も長二つに裂け、天空に勝ち誇ってはためく軍旗の竹進の旁に道を譲る。丁度朝日の旁の霧の如く、物質の紡乱せる暗さはその抗し難き接近に会ふや消え失せる。苦痛、病、不規律は一歩一歩その攻撃に会って退却し、ある。無智の障碍は押し除けられ、ある。盲目の闇は突き通されて、ある。そして見よ！富と健康と詩と芸術と智と愛との約束された国は次第に視界に現

は小つゝあるではないか。世は世の昏睡裡に
この人性の車は了史の巨大な重累に沿つて大
地をゆさぶりつゝ勝利の行進をするも、人性
の充実に近等く駆者はみないではないかと云
はんとするか。この勝利の行進に加はる小との
神の命令に応ずるを拒む者誰かある。この樂
しい詩衆から走り去り、神を無為の無関心の
中に求めんとする程の馬鹿をやるは誰か。こ
の外延の人性の文明、悲哀の深淵を怪、歎哀
の涙を怪、内外の数へ切れぬ程の障碍を怪
て、人百の力に勝利を獲得するための人百の
永久の努力、この凡てを、この人百の大世界を
虚偽なりと取へて呼ぶ程、虚偽に浸れるは
誰か。この充実の広大を素敵な詐偽と思ひ得
る者は、実際、真理である神を信じ得るか。
この世界から走り去ることによつて神に到達
せんと思ふ者は、何時、何處で神に会へると
期待するのか。どれ程遠くへ飛び得るや、無
そのものの中へ飛び込む迄飛んで飛び得
るや。否、飛ばんと欲する弁法者は何處にも

神を見出し得ない。我々は勇敢にも斯う云はねばならぬ。「我々は神に、こゝで、この故点で、今この瞬間に到達しつゝある。」と。

我々は我々の行動に先て、我々自身を実現しつゝあると如く、我々自身の中に自我の自我たる神を実現しつゝあると我と我身に保証出来ねばならない。我々は、我々の行動の道から自らの努力で、凡ての障碍、不規律、不調和を取払ふことによつて躊躇なくかく云へる権利を持たねばならない。我々は「私の仕事に私の歓喜があり、その歓喜の中に私の歓喜の歓喜が住んでゐる」と云ひ得ねばならない。

優波尼沙土(ウパニシャド)は、誰を「婆羅吸摩(ブラフマ)を知る人々の長」(162)と呼ぶか。その長は「その歓喜が婆羅吸摩(ブラフマ)の中に在り、その行動が婆羅吸摩(ブラフマ)の中に在る人、即ち行動的な人」(163)と定義される。歓喜の現はれのない歓喜は全く歓喜ではない。活動力のない運動は運動ではない。活動力は歓喜の現はれである。その歓喜が婆羅吸摩(ブラフマ)の中に在る人、その人はどうして無窮の中に

生き得やうか。婆羅門の歡喜が形を取り、
默現することになつてゐるものを彼の活動力
が統してはならぬのか。こゝに婆羅門を知ル
る人、婆羅門の中に歡喜を持てる人は彼の
活動力の全て、即ち飲食、生計樹立、慈善を
も亦婆羅門に持たねばならぬ所以である。
その詩に在る詩人の歡喜、その芸術に在る芸
術家の歡喜、その勇気の産物に在る勇者の歡
喜、その眞理の識別に在る智者の歡喜は、絶
之ず其等種々の活動力に表現を求むるれく、

大小となき日常事、眞理、美、秩序、慈善に
於て、婆羅門を知ル人の歡喜は神に表現
を与へんことを求める。

婆羅門自身も同じ様に己が歡喜に表現を
与へる。凡ゆる方向に射出さゝる彼の多面
な活動力によつて、自らの要なる創造物の
固有の欲求を満たしてやる。(164) その固有の欲求
とは婆羅門自身であり、て小故彼は多方向
に、多くの形に自らを与へてゐるのである。
婆羅門は働く。働かずしてどうして彼と雖

、自分自身を示し得やうか。婆羅門教の教義は、常にその創造なる献身の中に一身を献げつゝある。

この事の中に我々自身の真の意味が存する。この中に我々の父なる神との類似がある。我々は又、多方面の様々の目的を有つ活動に身を捧ててゐなければならぬ。吠陀(ヴェーダ)(165)に神は「自分自身を与へるものゝ、力を与へるもの」(166)と云はれてゐる。神は我々に自身を与へることで満足せずして、同様に我々が自身を捧げる様に力を与へるのである。この様に優波尼沙土(ウパニシャド)の予言者が、かくして我々の欲求を満たしつゝある人に、「我々に慈善の心を許与し給へ」(167)。我々に慈善の心を許与することによつて、我々のなる最高の欲求を満たし続へを祈る理由である。即ち神が孤独で我々の欠乏を取去るべく働くべきだと云ふのでは不十分で、神の活動の中で、善の実行の中で、神と共に働く希望と力とを我々に与へるべきだと云ふのである。かくして、まことに、我々と神との渾一

は成就さるであらう。善善の心は他人の自我の欲求は(168)（スワールトハ）我々自身の自我の固有の欲求（ニヒタールトハ）なる(169)べきことを示すものであり、人性の仕事に於る我々の多面の力の様々の目的の中に我々の歓喜が存することを示すものである。我々がこの善善の心の案内で働く時、その時に我々の活動力は調節さるが、機械的にはならない。それは欲求によって制執されたのである。

、霊の満足によって制執されたのである。

かゝる活動力は大衆の行動の盲目的模倣なる

を止める。流竹の指図に身体にも従ふことを止める。「神は宇宙の始めに在り、径りにも在り」と云ふことを、その中に見始める。同様に我々自身の仕事の泉であり、霊感である

ものは神であり、又その径りに神ある事知り、て小故に、我々の活動力の全ては平和と善と歓喜とによって浸透さるると云ふことを知る。

優波尼沙土（ウパニシャド）は曰く「智、力、行、は神の本性に見はるるものなり」(171)と。我々が歓喜を仕事

から今つ倣ひが有るのは、この当然なことが未だ我々の心の中に生れて来ない故である。我々の仕事の日は我々の歓喜の日ではない。我々はを心には休日が要るのである。我々は不幸なので、我々の仕事に我々の休日を見出し得ないからである。所はその休日を前進の流れの中に見出す。丈は焔の爆裂の中に、花の香りは大気へのその透徴の中に休日を見出す。然し、我々の日々の仕事には、我々にとつてのみ一る休日はない。我々の仕事が我々を打

頁かすのは、我々が自らを放棄せず、又、仕事に義人で、しかも完全に、自らを放棄しないからである。

おゝ、世自身をよみるものよ。(172) 世を歓喜と直覚して、我々の霊を世に丈の如く燃え上らしめよ、所の如く世に注がしめよ、花の芳香の如く世の存在を充満せしめよ。その歓喜と悲哀、その得喪、その興亡に於て我々の生命を養し、十分に養する力を我々に与へよ。我々をして世の宇宙を十分に見、且つ軍くに近

る力、又その中で十分な勇気を以て働くに足る力を持たしめよ。我々をして世が我々に授けし生活を十分に送らしめよ。我々をして勇敢に取り、勇敢に与へしめよ。こゝに我々の世に対する祈りである。我々をして断然と、世の歡楽は行動から離れた薄い、形の無い、支へのないものなりとの力無き幻像を我々の心から駆逐せしめよ。農夫が固い土を耕す處は何處でも、世の歡楽は穀物の緑となって進り出、人目が混乱せる森を排除し、石多き地を滑かにし、且つ自ら家屋を清掃する處では何處でも、世の歡楽は秩序と平和との中にを此を包含するのである。

おゝ、宇宙の労働者よ。(173) 我々は世に祈りたい。世の宇宙力の抗し難き流れをして、青の刺戟的南風の如く来らしめよ。人目の生命の広野を突進し来らしめよ。多くの花の香り、多くの森のさゞめきを齎らしめよ。我々の干乾らびし霊生活の無生命を美しくせしめ、且つを小に聲あらしめよ。我々の新に目覚めし力

主して、葉、花、実に於る無限の充実を叫び
求めしめよ。」